

# 医者 の理解が救いに



## LGBTのいま

### 4

「晴樹」

長崎市の晴樹さんは、体は女性として生まれたが、心は男性。物心ついた頃から、自分は男だと思っていた。不完全な人間だと思いついた。不満足で隠した。家に来た友達から、「男みたいな部屋ね」と言われ、急いでぬいぐるみを買った。

「これまでの人生が曇りだったから、これからは晴れの人を歩んでほしい」。女性っぽい名前から、男性風へと戸籍を変更するとき、母親が新しい名前をつけてくれた。

将来を悲観して死を考えた。最後に何をしたいだろうか。海で思いっきり泳ぐ自分を妄想した。女性の水着を着るのが嫌で、ずっと海を避けてきた。性転換手術を考えるようになった。

手術を受けるには、精神科のカウンセリングを受ける必要がある。20代半ばのころ、ある精神科を訪れた。医者ならば信じられると思い、心と体の性が一致しない悩みを打ち明けた。

ところが、医者は「そんな訳ないでしょ」。理解のない言葉に傷ついた。

別の精神科に行ったが、また否定されるのが怖くて、なかなか悩みを言えなかった。半年ほどして、おそろのおそろ話すと、「自分から話すのを待ってたんだよ」。患者の気持ちに向き合おうとする医者との出会いに救われた。

一方で、ホルモン治療や性転換手術を手がける国内の病院は少なく、情報の少なさに戸惑った。ネットで当事者の



団体の結成1周年に合わせて作ったTシャツを持つ晴樹さん。長崎市

## 性転換を経て人生晴れ晴れ

### ジェンダー外来 なお不足

GID(性同一性障害)学会理事長で医師の中塚幹也・岡山大学院保健学研究科教授は「必要な対応は一人ひとり違う。治療や手術が必要な人もいれば、メイクやファッションで落ち着く人もいる」と指摘。まずは性同一性障害に詳しい医師への相談を勧める。

だが、カウンセリングやホルモン治療などを総合的に手がけるジェンダー外来は、全国に10カ所ほどしかない。専門的な手術を安全にできる施設は、さらに少ない。

性同一性障害の人が自分の性別に違和感を感じる時期は、小学校入学までが過半数、中学生までだと9割に上ることが、岡山大病院の調査で分かっている。体に変化が出る思春期の子供のケアは大きな課題だ。中塚教授は「周りが本人の訴えに耳を傾け、専門医につないでほしい」と話す。GID学会では、教師や医師らへの啓発もしている。

3年前から、乳房切除や、子宮、卵巣の摘出など、国内やタイで計5回の手術を受け、「男一の体になった。手術には保険が適用されず、働いてためた数百万円の大半が消えた。

それでも、やっぱり手術を受けて良かった。体が男性に近づくとつれて自信がつき、

「気持ちは前向きになる。昨年、性同一性障害の当事者が集まる団体「黒船CREW」を作った。

交流会では医療の悩みを多く聞いた。病院探しの苦労や費用の問題など、共通している。性障害に取り組み医者が増えてくれれば」と切実に思う。

手術後、男性用の水着を着て海で泳いだ。「俺、今すんごい幸せなんです」